

デジタル時代における写真芸術について (銀塩プロセスとデジタルプロセスのあり方について)

絵画や彫刻といった伝統的なメディアによる表現は、直接的に身体を介して素材に関わるために、急激な技術革新にさらされる事は無いだろう。しかしながら、新たなメディアである写真や映像表現は、身体と表現の間にあるメカニズムそのものが科学技術と不可分であるために、現在、デジタル化の波にさらされている。そして、レンズを通じた光が感光材料に焼き付けられる事と、電気信号に置き換えられて記録される事には、その写真の本質的变化があるのではないか。という疑問から発せられた研究である。

もともと写真におけるデジタル化が進められたのは、近代の写真技術である銀塩写真における銀資源の枯渇と、また現像液等の処理過程における環境問題の解決のためであった。したがって、銀塩写真の性能や質に問題があったわけでは無い。しかしながら、急激なデジタル化によって、銀塩材料の生産を圧迫し、素材そのものが手に入らなくなりつつある。

写真の利便性を基にした、報道写真や広告写真の分野では、デジタル化のスピードは速く、ほぼ全てがデジタルに置き換わったと言って良い。しかし、写真表現を追求する分野では、未だに最上質の銀塩写真技術にこだわり続ける面が強い。本学も銀塩写真技術においては、最上質の写真処理が出来るシステムを構築している。しかしながら進捗速度の急激なデジタル技術には、予算的にも対応しきれずに来たといえる。未だに過渡期といえる写真デジタル技術であるが、芸術表現と呼び得る写真表現の制作にいかに対応できるのか。芸術の世界では、単にデジタルが新技術で、アナログが旧技術とは言い切れない側面が強くあり、その違いは何か。また、それぞれに良い部分を補填しあうことが可能なのか。デジタル技術における今日的芸術表現としての写真の在り方を研究しアナログ技術とハイエンドデジタル技術の融合の可能性を見つけることができた。

1, 本研究プロジェクトの第一歩として、現在一線で活躍中の写真家、芸術家にインタビューを行い、写真表現におけるデジタルおよびアナログへのこだわりとその理由、具体的な違いなど両面の可能性と現状を明らかにし、写真表現の現在と今後に向けた可能性をさぐり、データをまとめる。

最初に、ウェブサイトで一般向けのアンケートページをもうけ、150名近くの書き込みを得た。このことにより本件に関する感心の高さが分かった。また写真家100人程に、内容をより明確化したアンケートを直接送付し、返信率60パーセント程の回答を得た。予想を遥かに超える回答を得たといえる。

<http://www.geidai.ac.jp/tgprp/main.html>

2, 銀塩写真の様々なプロセス、撮影、現像、プリントと、デジタルを組み合わせる方法として、ウェットスキニング法等日本で確立していないスキニング法を開発し、フィルムとスキニングの詳細でベストな方法についての研究を行う。またデジタルデータから銀塩フィルムを制作する方法についても研究する。

実際に、ウェットスキャンなどの様々な方法を試みた。そして、市販スキャナーを改造し、バキュームスキニングする方法を発見した。この事により、大型フィルムからのデジタル入力の可能性が浮かび上がったと言える。さらに完成度の高いバキュームイーゼル及び、他の方法を研究開発する。



3, デジタルイメージの出力方法を研究する。様々なデジタルデータをいかに紙媒体にプリントするか。インクジェット出力の紙媒体の種類とその親和性を研究し、銀塩写真との感覚的違いを明らかにし、新たな表現方法につなげる。

ハイエンドキャリブレーターを導入し、デジタルプリントに関する全ての機器を整合させた。そして本学における写真プリントの可能性を考え、インクジェットの優位点である幅広く多様な印画紙を調査し、使用する誰もが正確なプリントができるようそれぞれのプロファイリングを行ないデータ化した。



4, 最新機能のデジタルカメラと、コンベンショナルな大型カメラの性能の違いを比較検討し、そこから読み取れるそれぞれの長所、欠点から、新たな撮影法を実験開発する。

さまざまなカメラの比較撮影テストを行った。最高級デジタルカメラと大型フィルムカメラの直接比較は、レンズの都合上できなかつたが、解像度的には未だ大型フィルムに優位性があるものの、写真の実用的な品質に関してはデジタルの性能が十分であることが分かった。

5, 新たなスキャン方式によるスキャナーの開発を試みる

フィルムの位置を工夫しガラスの影響を受けない8X10等ハイエンドフィルムスキャナーの開発を試み成果を上げた。

